

Rintaro Akamatsu Piano Collection Vol.1

こどものための小品集 2020

曲目解説

長井 進之介

[1] Bastien: Gypsy Carnival / バスティン：ジプシーカーニバル

アメリカのジェーンとジェームス・バスティンによって開発された「バスティン・メソッド」。ピアノの演奏技術と共に、様々な音楽のスタイルを体系的に学べるようにまとめられており、世界 10 数か国語に翻訳され、多くの人々のピアノレッスンで重要なメソッドとして利用されている。《ジプシーカーニバル》はバスティンの『ピアノライブラリー ピアノソロ レベル 3』に所収。哀愁を漂わせた跳躍を伴う旋律が軽やかに奏される主部と、チェロを思わせるのびやかな低音の旋律との対比が美しい楽曲である。

[2] William Gillock: Clowns / ギロック：道化師たち

作曲家・教育家であるウィリアム・ローソン・ギロックは、アメリカ・ミズーリ州のなだらかな丘に囲まれた緑あふれる環境の中で音楽好きの家庭で育った。子供のころはポピュラー・ミュージックを愛したギロック。彼は好きなメロディに自分で伴奏をつけてピアノを楽しみ、そのハーモニーが何の種類なのかもわからないまま 50 種類以上のコード進行を使いこなしたといわれている。のちに専門的な教育を受けるようになるが、「美しい響きを心から愛し、楽しんだ」幼少期は、ギロックの音楽の重要な素地を作り上げていった。《道化師》はジャグリングをしている道化師の軽快な動きそのものを、音楽はもちろん、演奏者の動きにも反映。スタッカート之音型が右手と左手で受け渡されていく。

[3] Céleri Haruhata: How Are You, Pim? / 春畑セロリ：ピム、ごきげんいかが？

ジャズの要素を取り入れ、付加音や半音階、リズムの面白さを効果的に使うことで高揚感や楽しい気持ちをわかりやすく表現した作品で大人気の作曲家、春畑セロリのこどものためのピアノ曲集《ひなげし通りのピム》の第 5 曲。主人公の妖精ピムがさまざまな場所に出かけて出会うものやできごとが楽しい音使いで表現されている。この曲は上下行する音型が問いかけのように奏でられ、楽しい雰囲気を作り出しているが、時折不安が顔をのぞかせるような和音の響きも聴こえてくる。

[4] Shin Sato: Yuki-moyou / 佐藤臣：ゆきもよう

さまざまな子供のための作品を書き人気を集めている佐藤臣。《ゆきもよう》は単音ながら存在感のある低音の響きに支えられてやわらかく旋律が歌われていく。中間部では和声の変化が美しく、景色の移ろいを描いているようである。この曲は田中冬二の詩、「雪の日」にインスピレーションを得て作曲された。タイトルが「ゆきもよう」となっているが、雪が降っている様子を描写しているわけではなく、「これからしんしんと雪が降るだろう」というイメージをもって書かれているという。

[5] Norman Dello Joio: Bagatelle / デロ＝ジョイオ：バガテル

ノーマン・デロ＝ジョイオはアメリカの作曲家。オルガニストでもあり、作曲家としては合唱作品や吹奏楽作品がよく知られている。彼の作品は厳格でありながらも旋律性に富んでいる。《バガテル》はオルガニストであったデロ＝ジョイオらしい楽曲で、変奏曲的な展開と、オルガンを思わせる響きの効果的な使用が特徴である。

[6] Aram Il'ich Khachaturian: A Little Song / ハチャトゥリアン：小さな歌

グルジア（現ジョージア）の作曲家であり指揮者でもあったアラム・ハチャトゥリアン。彼の作品はコーカサス地方の民俗音楽の要素が取り入れられており、力強いリズムや語り聞かせるような旋律が特徴的だ。これは4世紀には根付いたキリスト教の音楽、16世紀から20世紀にわたって支配されていたトルコの音楽の影響が強い。〈小さな歌〉は《子供のアルバム》の第1曲で、半音階進行的な左手の動きに前打音を伴った旋律が絡み合う。故郷や子供時代を想い、静かに物思いにふけているような雰囲気を感じられる。

[7] Karen Tanaka: Spring Light / 田中カレン：戯れる春の光

“美しさ”を音で表現することにかけて右に出る者はいないほどの世界観をもつ作品を数多く世に送り出してきた田中カレン。《愛は風にのって》は、2013年に逝去した師、三善晃への田中の愛情と、師との思い出の日々が音で綴られたピアノ曲集である。全曲を通して、四季のうつろいと共にやさしい記憶が、繊細なメロディと様々な色を伴いきらめくような響きによって彩られている。第1曲を飾る〈戯れる春の光〉は、右手の付点リズムと左手のシンコペーションのリズムが、アンバランスながら不思議と溶け合っていく音のゆらぎを紡ぎ出していく。

[8] Tomohiro Moriyama: A dance of a rainy day / 森山智宏：雨の日のダンス

作曲家であり、教育家としても活躍する森山智弘が、子供たちのために初めて書いた作品である。自らの作品を通して技術を学ぶことはもちろん、過去から現在につながる音楽の歴史をしっかりと学んでほしいという思いが込められた森山の作品には、バッハやショパンといった作曲家のオマージュも多く含まれている。彼にとって初の子ども用作品となった《雨の日のダンス》も、既にその思いがしっかりと

反映された楽曲となっており、ショパンの《雨だれの前奏曲》のオマージュとなっている。“ラ”の音が反復され、その上でリズムや強弱の変化やコントラストなど、さまざまな表現が求められるワルツとなっている。

[9] Sergei Prokofiev: Tarantelle, Op.65-4 / プロコフィエフ：タランテラ Op.65-4

ロシア出身の非常に優れたピアニストであり作曲家であるセルゲイ・プロコフィエフ。古典的な様式から徐々に先鋭的に、そして最終的には抒情的な作風へと変化を遂げていった彼は、1917年のロシア革命によってアメリカとヨーロッパへの亡命を余儀なくされる。やがてロシアに帰国し、再び家族と共に生活を開始したころに書かれたのが《子供の音楽—12のやさしい小品》であった。これには当時の音楽教育に力を入れていた国策の影響もあり、明快かつ芸術的な作品の創作が求められていたことも大きい。すでに独自の作風を確立しはじめていたプロコフィエフであったが、この作品は古典的なスタイルを基本として、そこにプロコフィエフらしい響きが効果的に差し込まれ、絶妙なバランスによってまとめられている。曲集の第4曲である〈タランテラ〉は、8分の6分拍子による急速な舞曲「タランテラ」のリズムが一貫して奏でられ、常に速いテンポの中で次々と転調が繰り返されていく。

[10] Claude Debussy: The little Shepherd / ドビュッシー：小さな羊飼い

フランスの作曲家、クロード・アシル・ドビュッシーが溺愛した一人娘エマのために作曲したピアノ曲集《子供の領分》の第5曲。彼の代表作《牧神の午後への前奏曲》を思わせる旋律が単音で奏でられて曲が開始する。旋律は草原の中で羊飼いがひとりで奏でる笛の音であろう。どこまでも広がる自然の中で静かに響く音色はどこか哀しくも美しい。ほとんどが弱音で奏されるが、繊細なニュアンスの変化が多用されており、和声変化のうつろいは、風や香りの変化を思わせる。

[11] Akira Yuyama: Oni-Arare / 湯山昭：鬼あられ

作曲者の「ピアノという楽器を思いっきり歌わせお喋りさせたい」という想いがつまったピアノ曲集『お菓子の世界』は、1971年にNHKの番組「ピアノのおけいこ」のために第1曲〈お菓子のベルト・コンベヤー〉が作曲されたことを契機に、続く25曲が全音楽譜出版社の委嘱により作曲された。様々なスタイルの曲が収録され、ピアノ演奏における様々なテクニックはもちろん、民謡を思わせるものからジャズ風の作品まで非常にバラエティ豊かだ。〈鬼あられ〉はタイトルとなったお菓子の固い噛み応えを表すかのように冒頭から「悪魔の音程」ともいわれる増4度音程の音型が使用される。そのあとは日本の祭りばやしのように軽快な音楽が不協和音も使われながら展開していく。

[12] Osamu Katsuki: Arabesque in forest / 香月修：森のアラベスク

「森の情景」をテーマに様々な情景や動物を描いた全33曲の《ツグミの森の物語》の中の1曲。「ア

ラベスク」は、「アラビア風の」という意味で、即興的で軽やかな装飾で彩られた小品に用いられる標題。この曲も音型同士の掛け合いで溶け合っていくような譜面となっている。選ばれた口短調という調性は音階の中でもっとも「不安定」とされる。そのため弦でも管でも響きにくい音色である。ベートーヴェンはこの調を「悪魔の調」と呼び好まなかったが、その分、孤独や寂寥感を演出できる効果が高い。この曲では悪魔的なものや暗闇は感じないものの、森に足を踏み入れた時に感じる、言いようのない不安が繊細に描かれている。

[13] Mihoko Nakamura: Moon Rabbit / 中村美穂子：月うさぎ

ピティナの新曲課題曲の作品公募（2014年度）によって生まれた作品。やさしい月の光をあらわすように静かな和音が奏されると、徐々に月の中に浮かぶうさぎが軽やかに駆けまわるように、三連符と付点リズムによるメロディが奏でられていく。中間部では転調によって月の移り変わる様々な表情が鮮やかに表現されている。

[14] Béla Bartók: Three folksongs from the county Csik / バルトーク：3つのチーク県の民謡

ピアニスト・作曲家でありながら民俗音楽の研究家でもあってバルトーク・ベーラ。作曲家としてはキャリアの最初はブラームスの影響を受けた厳格なスタイルであったが、ハンガリーの作曲家として独自の作風を確立しようとする中で、1904年には現スロヴァキア領であるゲルリーツェプスタでマジャールの民謡に触れて民謡の採集を開始する。その中で、1907年の夏に現ルーマニアのチーク県で出会ったのが羊飼いの老人が吹く笛の音色だった。バルトークはその旋律を笛とピアノのために編曲。さらにピアノ独奏に編曲したのがこの作品である。3つの楽曲から成っており、第1曲は旋律に即興的な装飾が施された技巧的なもの。第2曲は愛し合いながらも親の反対にあって苦しむ恋人たちの哀しみが旋法と不安定なリズムによって描かれており、第3曲は徴兵令を受け故郷を離れる少年たちの想いが決然と奏される。